

赤レンガ館

所在地 大分県大分市
建物用途 事務所・ホール（現在）
銀行（改修前）
竣工 1913年
改修 1993年
所有者 株式会社大分銀行
設計者 株式会社佐伯建設一級建築士
事務所
施工者 株式会社佐伯建設



〈審査評〉 この建築は、オリジナルは明治43年（1910～1913）の辰野金吾の設計によるものである。（東京駅の完成が1914年であるから、ほぼ同時期の作品である。）説明によると、当時博士のスタッフであった佐伯与之吉が設計と施工を担当して完成、その後大分にて佐伯建設を創設したという。設計と施工が明確でなかった当時としては自然の成り行きであったと推察される。今回の設計・施工も同じ佐伯建設によるものだから、同社はこの建築とともに歩んできたことになる。

この間、昭和20年7月（1945）戦災に遭い、外壁を残して焼失したが、2年後（1947）、黒こげになったレンガと一部増設などを大阪の双星社・竹腰博士監修のもとに改修し、更に今回（1995）金庫部分、裏庭部分、及びキャノピーを改修・新設している。

機能的には銀行本店、貸事務所や貸ホールとして変転してきたが、今回大分銀行創業100年の事業として、同銀行支店としての改修が行われた。市民に開かれたサロンを提供したこと、裏庭を新しい通りに開放するなど、開かれた銀行に変容するなどの努力がなされている。

評価点の第一は、八十数年の長きに及ぶ変容とたび重なる改修に、同じ施工会社がお付き合いをし、オリジナルを保存してきた点である。また第二は、建築の裏側の空間を生かして小広場を整備し、街づくりに積極的に参加した点が上げられよう。

とはいえ、残念と思われる点もなくはない。そのひとつは外装の改修に当たって、レンガ造の上にレンガタイルを使用している点である。そのためオリジナルでは出目地であったと思われる壁面が消えてしまった、枠回りのチリの出がなくなるなどの弊害がでてしまった。

しかし、これは戦後間もなくの改修のことで、サンドブラストなどの技術が期待できる状況ではなかったのではあるまいか。また、今回の改修で新設したキャノピーに使われている曲線が、オリジナルの建築からすればやや異質に感じられたことである。これは辰野博士の美学を、今少し深く考察する必要があったのではなかろうかと惜しまれる。

ともあれ総合的には、持続的な管理と改修・保存の巧みな結晶として、今回の受賞にふさわしい建築であることが認められた。